

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 20 日現在

機関番号：24505

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20592597

研究課題名 学童のヘルスプロモーションに関する看護介入プログラムの効果

研究課題名 Effectiveness of the Lifestyle Improvement Program for School Children

研究代表者

二宮 啓子 (NINOMIYA KEIKO)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50259305

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：学童、親、生活習慣、ヘルスプロモーション、介入研究、自己管理、自己効力感、ソーシャルサポート

1. 研究計画の概要

(1)目的

先行研究での反省と文献検討から得られた知見より、学童への個別の介入内容の強化と両親の生活の自己管理能力を高める介入内容の追加の2点を改良し、学童とその親の生活の自己管理能力を高めるための1年間の看護介入プログラムを洗練させる。それを用いて、学童とその両親に介入を行い、学童の自己効力感、サポート感、健康に関する認識、生活行動、肥満度の改善への効果を明らかにするとともに、両親の自己効力感、健康に関する認識、生活行動の改善への影響を明らかにする。また、介入1年後の生活状況を明らかにし、本プログラムの長期効果を評価する。

(2)方法

①調査方法

家族参加プログラムを導入し改良した1年間の看護介入プログラムの効果を評価するために、介入プログラム前後に学童の自己効力感、ソーシャルサポートの質問紙調査と健康の定義、健康状態の認識、日常生活行動についての面接調査、及び親の自己効力感の質問紙と健康の定義、健康の認識、日常生活行動についての面接調査（もしくは質問紙調査）を行う。また、長期効果を評価するために介入終了1年後に質問紙調査を行う。

②介入プログラム

学童と親にそれぞれの健康の認識や生活の特徴を踏まえた個人指導（面接あるいは手紙を用いて）、学童に月1回2時間、放課後に栄養・運動についての学習と実践を行う集団指導を行う。介入プログラムの効果の信頼性を高めるために、対象者数を増やす必要が

あるため、1年間の看護介入プログラムは2クール（平成21年度はA小学校、平成22年度はB小学校）行う。

2. 研究の進捗状況

本研究は、家族参加プログラムを導入した学童の自己管理能力を高める1年間の看護介入プログラムの短期効果、長期効果を明らかにすることを目的に、2つの小学校の学童とその親を対象に実施した。研究参加者は、小学1～6年生22名とその親23名（母親15名、父親8名）であった。介入プログラムは、学童と親への個人指導に加えて、学童への月1回2時間、放課後に栄養・運動についての学習と実践を行う集団指導を合計10回実施した。そのうち、夏休みの1回は家族参加プログラムを実施した。また、介入前後に介入プログラムの評価のための調査を実施した。その結果、学童の肥満度は、介入前後で肥満度の区分が、標準11名→14名、軽度肥満4名→3名、中等度肥満6名→4名、高度肥満1名→1名と標準に集約する傾向が見られた。また、介入前後の自己効力感の得点は有意差が見られなかったが、ソーシャルサポートの得点は有意な増加傾向が見られた。学童の生活習慣の変化については、間食の回数の減少、運動頻度の増加、睡眠時間の増加が見られた。また、22名中17名がプログラムで学んだことを生活に生かしたと答え、その内容は、「体重を測るようになった。毎日測ると減った、増えたが分かり、夕食の量を少なめにするとか気をつけるようになった」、「お菓子のカロリー表示を見て買うようになった」、「今まで運動をしようと思っても、まあいいかと思ってしないこともあったが、目標

に書いたこともあってすることができた」等であった。一方、親の調査では、母親は「自分以外の家族が以前より意識して子どもに声をかけてくれるようになった」、「意識的に運動を続けている」、「家族参加プログラムに参加して自分が作っている食事の何を改善すればよいか分かった」等の認識・行動の変化が複数の家族で見られた。また、父親に子どもの健康管理に対する役割意識の高まりが見られた。

3. 現在までの達成度 <区分>

②おおむね順調に進展している。

理由：平成 20 年度に文献検討を行い、介入プログラムを改良した。平成 21 年度には A 小学校で 1 クール目の介入プログラムの実施と調査、平成 22 年度には B 小学校で 2 クール目の介入プログラムの実施と調査、並びに A 小学校での研究参加者の介入 1 年後の調査が終了し、3 年間研究計画のとおりに進んでいる。また、研究結果を徐々に学会等で発表している。

4. 今後の研究の推進方策

平成 23 年度は、B 小学校の研究参加者の介入 1 年後の調査を実施するとともに、2 クール実施した介入プログラムの効果として得られた調査データを分析し、学術集会、学術雑誌等で発表していく。また、これまでの研究で得られた知見を加えて、パンフレット「生活習慣病にならないための子どもと家族の生活の工夫」の改訂版を作成し、本学ホームページからダウンロードできるようにする。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 二宮啓子、小児生活習慣病患者の家族のケア、家族看護、8(2)、40-45、2010、査読無
- ② 二宮啓子、丸山浩枝、宮内環、庄司靖枝、学童における 1 年間の生活習慣改善プログラムの効果、神戸市看護大学紀要、15、25-34、2011、査読有

[学会発表] (計 6 件)

- ① 丸山浩枝、二宮啓子、宮内環、松本美保、庄司靖枝、小学校における生活改善への 1 年間の介入プログラムによる肥満児の変化—初回と 2 回目の参加者の比較—、日本小児看護学会第 19 回学術集会、2009.7、札幌
- ② Ninomiya, K.、Maruyama, H.、Miyauchi, T. & Shoji, Y.、Intervention Study on

Health Promotion among Elementary School Children. The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, 2009.9, Kobe

- ③ 丸山浩枝、二宮啓子、庄司靖枝、生活改善への介入プログラムに継続して 2 年以上参加した肥満児の変化、第 56 回日本小児保健学会、2009.10、大阪
- ④ 二宮啓子、丸山浩枝、庄司靖枝、宮内環、松本美保、小学校における生活改善プログラムの効果—肥満児と非肥満児の比較—、日本小児看護学会第 20 回学術集会、2010.6、神戸
- ⑤ 丸山浩枝、二宮啓子、庄司靖枝、小学校における生活改善プログラムの効果に関する研究 (第 5 報)、第 57 回日本小児保健学会、2010.9、新潟
- ⑥ Uchi, M.、Ninomiya, K.、Maruyama, H. & Tsujii, S.、Effectiveness of the Lifestyle Improvement Program for School Children, 14th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2011.2, Seoul

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]